



こんにちは

日本共産党市議会議員

小野寺ゆきえです！

2025年
9.7
No.1108



医療費削減の波が苦小牧にも!!

自民・公明・維新の“3党で合意”では、今後4兆円の医療費を減らす方針です。その手法の1つが、全国11万床の入院ベッドの削減です。減らすために国は、1床に対し400万円を病院に補助します。お金を出してまでベッドを減らしたいのは、入院患者を減らし、医師も看護師も今以上に減らすことができるからです。

コロナ禍の時は、病床数が足りず救える命が救えなかったという事案が全国で発生しました。病院のベッドの利用状況（病床利用率）は、日常的余裕がなければ、いざという時に対応できません。なので、あえて病床利用率を7割程度にして余裕を持たせています。

国は、「各病院のベッドはたくさん空いているから、減らしても問題はない」と言いますが、ベッドが空いているのは、医師や看護師が不足しているからです。

国が、医師や看護師の増員をしてこなかったからであり、苦小牧市立病院でも、人員不足で26床を休止しています。

そんな時、9月議会の議案書を見てビックリ!! なんと、市立病院のベッドの削減が提案されていました。削減数は休止26床のうち10床。10床で約4000万円が病院に入ります。近年の病院経営では、赤字が想定されることで、「大事な財源確保」だと言います。

コロナ禍の時は、「市立病院が公的病院として役割を果たす必要がある」と、コロナ患者を受け入れてきました。通常の感染病床は4床だけですが、一般病棟を閉鎖して24床まで拡大して対応しました。それでもベッドは足りず、重症でなければ札幌の宿泊療養施設（ホテル）で療養せざるを得ない市民が多くいました。

コロナは第5類（インフルエンザと同等）に分類されましたが、今後もまた、未知のウイルスが流行する可能性はあります。そんな時に、市民の命を守ることができるのでしょうか。

病院の職員さんにお話を聞くと、「国の地域医療構想で病院が削減されることに危惧している」「引下げられた今の診療報酬では、どの病院も赤字は避けられず、効率的な運営をしなければ継続できない」と話します。そして、「コロナ患者を受け入れることができたのは、病床に余裕があったから」とも。“3党合意”の撤回と、診療報酬の引き上げこそ、医療を守る道です。